

素堂說

稼堂陳人

畏友宇野士行。一日語余曰。吾嘗讀中庸。自號曰素堂。請君爲之說。余曰諾。乃曰。天地俯仰。其道一而已矣。夫天道得一而明。地道得一而固。人道其無一而可乎。故曰。惟一惟精。不其然乎。故一其德。是爲大人。二三其德。是爲小人。治者之所以成治。以一其方也。學者之所以成學。以一其志也。一之不可已。其如此矣。今中庸之所謂。其意不在茲乎。君子素於其位而行。不願乎其外。素富貴。行於富貴。素貧賤。行乎貧賤。素夷狄。行乎夷狄。素患難。行於患難。君子無入而不自得焉。夫行者。何。行其一也。其一何。其所主也。漢人謂之獨立之操。西人謂之自主之權。其所主異。而其所主則一也。嗚乎。一心所主。既定矣。則劍山刀樹。起於脚下。而不懼矣。疾雷掣電。掠於耳邊。而不驚矣。人生之快樂。實在此矣。余之應聘於金澤學校。君既在焉。觀其投徒。聞若無人。余知其異於常人。而與君語。恰如舊識。其後往來徵逐。常訪忘歸。不啻牛醫之子也。抑今日。世叔俗漓。不論上下。不問官民。附熱逐臭。拂髻舐痔。不復知人間有羞耻之事。語之於妻子。而不泣者。幾希矣。嗚乎。處斯滔々之世。而執其一而不動。素其位而不移者。抑誰哉。不知君之所志。在茲乎否。士拊掌曰。得矣。乃書以爲贈。

乙未新年書懷

教授 秋月胤永

進軍知略取天津。柳樹伸眉梅動唇。天意方欣歸我厚。龍顏有喜與年新。敵無堅陣標忠烈。虜已稱臣看法真。諸將苦寒應徹骨。翻思雪戰幼時春。

寄征清軍士

其一

遠謀深慮在先天。功欲成邊尤欲堅。事是機觀機當審。兵元勢制勢要圓。氣吞四百餘州地。思溯二千幾世年。將建斯無窮國本。老狂難忘此良緣。

其二

不恠兵鋒愈擴張。神州男子悉剛腸。軍團器備砲船美。忠勇兵隨相將良。大勢歸吾全世界。東洋立極聖天王。利名萬國彼何物。國耳忘身此偏強。

明治乙未元旦

無名子

千門萬戶祝清朝。聖德無人說帝堯。想見金州新領地。旭旗肅々颺天颯。

又

明治二十八春風。一吹猶和三省戎。天日由來非有兩。豫期聖德萬邦同。

初春郊行

詩卷在囊瓢。在腰微吟緩。々渡村橋。數聲鶯語。春猶澁。一點梅花雪。未消風。乘飛。鳶雲。漢。戾。水。潛。老。鯉。澤。中。跳。這。般。清。味。人。知。少。惟。有。富。峯。隨。處。邀。

梧園先生曰 三四陽曆新年實景

閨怨

縱有綵琴誰共彈。秋高胡地授衣難。可憐皎々閨窓月。已照韓山白骨寒。

梧園先生曰 高調可喜

失題

獸之王兮禽之魁。獐獅隘兮悍鷲。我是行誓捕燕京。鹿充莫汝決爲二毛餌。

又

弱之肉兮強之食。獐獅惟西悍鷲北。君不見東洋別有神龍棲。雄飛蹂躪禹九域。

梧園先生曰 雄絕快絕在今日賦詩者宜如此

寄征清軍士

秋月胤繼

義氣如精鉄。凜然衝斗牛。銳鋒破賊膽。猛威動五洲。堅塞望風陷。關門棄不收。危機眉頭迫。滿朝無遠謀。沈痼俄難療。痛擊初可瘳。九功僅一篲。要在扼咽喉。

全

園田益太郎

握手送君纔四旬。一齊相祝酌清醇。結盟城下知何日。既到乾坤驗蕩春。連戰連勝百日間。碧蹄深入益多艱。山河一望奉天路。春色何時到玉關。黃海偉功今古無。良灣佳港委馳趨。砲台巨艦已摧折。欲向何邊進艚艫。

題雪中奮門圖

萬嶽千峯天色濛。砲烟深處旭旗紅。將軍一令如潮湧。血漲寒風飛雪中。

寄雪庵先生

飯田御世吉郎

回頭往事已悠悠。自去高門知幾秋。蘇岳之烟白川月。終宵夢繞枕濤樓。

稼堂先生曰 情景兼至。足以摩古人壘。

雪曉獨歸

江山渾一白。穿竹獨吟歸。凍雀驚飛去。續紛雪壓衣。

又曰 清迥可愛。

流車中口占

千里麟々響若雷。火輪走處凍雲開。斜麟一陣穿玻璃。倒却阿蘇山雪來。

幽栖

山內正瞭

信手西窓傍水開。門前山繞境幽哉。酒茶使我能醒醉。猿鶴無人自往還。十畝溪居雲擁屋。兩隣籬落竹交梅。土床石枕倦來睡。布遍青茵雨後苔。

稼堂先生曰 景趣幽絕萬遍不厭。

雪梅

梅花竹外漏春光。玉骨冰肌出短牆。積雪朝來渾沒了。不埋瘦影與寒香。

稼堂先生曰 是埋骨而不埋名之遺意佳甚

雪意

凍雪漠々夜沈々。凜烈寒威徹布衾。明日如催觀雪會。何邊最是可行吟。

稼堂先生曰 餘音嫋々

一月廿日夜雪

寒威烈々夜沈々。群動無聲總似瘖。平地忽看寸餘雪。明朝更作幾層深。

又曰 結有趣

節後菊

重陽之後立冬前。籬菊朝來露未乾。自向秋食含馥都。豈從春奔競鮮妍。雪霜堆裏獨持節。草木叢中誰比肩。挺秀陶家三逕下。枝々何必濯清漣。

## 批評

### 批評諸君に答ふ

村川 堅 固

其 一

松本君足下、僕の嚮に卑見を本誌に述ぶるや、圖らざりき、君の高願を得て、遂に君をして數百言を費さしむるに至らんとは。恐懼何ぞ堪へむ。君が言滔々數百言、其一半は實に僕一身の事に關す。其辭或は隱約に、或は直截に、僕をして慚愧せしめ、興奮せしめ、又時に懷に層させざらしむるものあり。即ち僕の辯せんを欲する所、亦多からざるに非ず。然れども由來龍南會雜誌の紙面甚だ高價、僕一身の故に多く之を費す、僕の忍びざる所。寧ろ如かんや、一日閑を得て君と靜地に會し、胸襟を披いて、誨を乞ふの愈れるに。

若し夫れ他の一半は即ち僕の所説に對する高批評なり。僕の辯すべき所實に此に在り。君が言多しき雖も、要するに、僕始めに國會新聞中なる國民体力の減耗は、單に學理の研究にのみ拘泥し、體育の養成に意を用ゆるの冷淡なるに由る、の句を引きつゝ、又戰國時代の國民体格の偉大なりしは、朝夕武を練るに暇なかりしに由る、といひつゝ、後段救治策に至つて、君が所謂「小刀細工流」の節酒を遠婚を以て、「無上の救治策」となすは、これ「前後撞着」にして「事の本末を誤りしもの」なり、といふにあるものと如し。君が僕の不肖を以てせずして、鄙文を讀むの精なりしは、僕の謝する所。たゞ疑ふ、君果して鄙文の性質を誤りたるの嫌なきを得るか。

鄙文一篇、素是賀來教授論文の批評なり。然して前段と後段とは、僕平生の所思を以て、其首尾に附記したるものにして、中間救治策の一段、是批評の本部なり。故に此段中述ぶる所、一として教授の考案に對する僕の卑見に非るはなし。曰く「節酒の美風を普及せよ」と。何か故に之を言ふ。他なし、賀來教授の食物の改良に對する僕の愚信、此の如くなればなり。曰く「近親結婚の害を善知せしめよ」と。故に之を言ふ。他なし、教授の結婚法の改良に因て起りし愚考、此の如くすればなり。即ち一段述ぶる所のもの、徹頭徹尾、教授の所説に隨伴して、未だ嘗て離れざるなり。是れ批評文の性質當さにかゝるの如くするべし、と信すればなり。即ち僕の此等の策に於ける始めより嘗て輕重をいはず、本末をいはず。況んや君が誤解せるが如く、これを以て「無上の救治策」となさんや。君の疑惑は鄙文の批評文なるを忘れたるに由りて、起りしものなるなきを得んや。且つ君僕が練武に對して「此他」の冒頭を置きて、僅かに三行を費したるを以